



## 鈴木 敏泰 (准教授)

1985年名古屋大学理学部卒 1987年名古屋大学理学研究科前期課程修了 1992年カリフォルニア大学サンタバーバラ校博士課程修了、Ph.D. 分子科学研究所助手、1995年NEC基礎研究所を経て1998年1月より現職  
TEL: 0564-59-5530  
FAX: 0564-59-5510  
電子メール: toshy@ims.ac.jp

我々のグループは有機合成化学が専門であり、新しい電子物性を目指した分子物質開発のため、電子系有機分子の設計と合成を行っている。これらの分子を用いた素子の作成は他グループとの共同研究で行い、物性測定による評価をフィードバックし、より優れた分子の開発を進めている。現在取り組んでいるテーマを述べると、

### アモルファス性有機電子輸送材料の開発

有機エレクトロルミネッセンス(EL)素子は、液晶に続く次世代のフラットディスプレイとしてすでに実用化が始まっている。

これを構成するホール輸送材料および発光材料に関しては多くの高性能な分子材料が知られているが、金属電極から発光層への電子移動を滑らかにする役割の電子輸送材料は非常に少ない。このため我々は全フッ素置換されたフェニレン dendrimer を設計し、 $C_{60}F_{42}$  (分子量: 1518) および  $C_{132}F_{90}$  (分子量: 3295) を有機銅を使ったクロスカップリングにより合成した。<sup>1)</sup> 真空蒸着によりアルミニウムキノリン錯体を発光層、フッ化フェ

ニレン化合物を電子輸送層とした有機EL素子を作成したところ、すべての素子で発光が見られた。電気化学測定の結果によれば、フッ化フェニレンの電子親和度が増加するとともに素子の性能が向上することがわかった。これらの知見をもとに合成した直線状オリゴマーでは素子の性能が劇的に改善され、実用レベルまで達した。<sup>2)</sup>

### 有機n型半導体の開発

最近、有機トランジスタ(Field Effect Transistor: FET)に注目が集まっている。これを構成する有機半導体はほとんどがp型(ホール移動)であり、n型(電子移動)のものは少ない。p型およびn型から構成される消費電力の小さい相補型集積回路を構築するためには、大気中安定で電子移動度の高い有機n型半導体の開発が必要である。また、有機単結晶を使ったFETではレーザー発振や超伝導が観測されるなど基礎物理としても大きな関心を集めている。有機n型半導体は既存の化合物がその改良にとどまっており、合理的な分子設計による全く新しい分子というのは見当たらない。我々は、有機EL素子の電子輸送材料開発から得た知識を使い、有機FETに適した新規n型半導体の開発を進めている。

### 参考文献

- 1) Y. Sakamoto, T. Suzuki, A. Miura, H. Fujikawa, S. Tokito and Y. Taga, "Synthesis, Characterization, and Electron-Transport Property of Perfluorinated Phenylene Dendrimers," *J. Am. Chem. Soc.* **122**, 1832-1833 (2000).
- 2) S. B. Heidenhain, Y. Sakamoto, T. Suzuki, A. Miura, H. Fujikawa, T. Mori, S. Tokito and Y. Taga, "Perfluorinated Oligo(*p*-Phenylene)s: Efficient n-Type Semiconductors for Organic Light-Emitting Diodes," *J. Am. Chem. Soc.* **122**, 10240-10241 (2000).

